



ジュン
お願いがあるんだ

永く抱き合った後、ぽつりと加夏子が言った。

「なに、カナ」
「…ワタシを想って。ワタシのことだけ強く想って」
「いつも想ってるよ」
「そうじゃない。ワタシをみて。ワタシを視たいと…それだけを想って。お願い」

突然の言葉に殉が返事をできないでいると、覆い被さっていた加夏子の身体がふいに離れた。

しゅるしゅる
ばさっ

衣擦れの音が深夜の部屋に響く。
やがて足音が離れてゆくと、扉が開く音が聞こえた。

「わたしをみて。なんにもない生まれたままのわたしを。ぜったい見られるから…ジュンが望めば…」

何か言おうとした瞬間、殉の脳裏にまばゆい光が差し込み、次の瞬間…

視ていた。
知らない部屋。バスルーム。
大きな鏡に、覚えのある女の姿。
裸だった。隠そうともしていない。
小振りな乳房も、淡い陰りも、全てをさらけ出していた。

きれいだ

殉は言葉をなくして、頭に浮かぶその映像をくい入るように視ていた。
生まれて初めて視る裸の女性だった。
それは神々しく彼の心に焼き付いた。

視界が回る。
バスルームを出ると、ベットに横たわる自分の姿が映った。
衰弱した自分が酷く惨めな姿に映った。

「どお？ 見えた？」
「女神と奴隷みたいだ、まるで」
「奴隷？」
「ボクは役立たずだね。もうカナを守れそうにないや」
「そんなことない！ ジュンはワタシにイッパイいろんなものをくれた。ワタシ、わたしね…」

自分の姿が迫ってくる。

加夏子が側に来たのは視なくても判った。

あなたが、すき

だから…触れたい…触れてほしい…もっと…

加夏子の手が、殉のシャツのボタンを外していた。

もう視る必要は無かった。

殉はうねりに身を任せた。

◇

ぶええーくしょんっ！

ホテル前の茂みの中で、銀さんは盛大に鼻水をすすり上げた。

ワンカップの日本酒が半分、道にこぼれてしまったのをうらめしそうに眺めて、銀さんはジャケットの裾で顔を拭いた。

二人を置いて立ち去るつもりは、はなから無かった。

遠くから見守る。いつものように。

それだけが今、自分に出来る事だと思い定めていた。

気配

振り返ると、見たことのない男が立っていた。

「？」

銀さんは眉をしかめた。

細身。長身。影のような男。
街灯の薄明かりの下、陽炎のように揺らいでいる。

「誰だ」

銀さんの声がこわばる。影は尋常でない気配を放っていた。
斬った斬られたの世界で生きていた銀さんにとり、間違える筈もない気配だった。

死の際にまつわりつく、気配

「お前こそ、こんな所でなにしてる」

影が口を開いた。
修羅場を踏んできた銀さんですら背筋の寒くなる声だった。

「誰かを見張ってでもいるのか」

「…」

「おおかた地回りか何かか。やっかいごとなら余所でやれ。ここで騒ぎをおこす事は許さん。うせろ」

瘦身の男が銀さんに向かい言い放った。
淡々と告げる言葉に、底知れぬ威圧感が隠れていた。

「お前がタダモンじゃねえのは判る。だが何処の誰かも知らねえ奴に脅されて引き下がる訳にはいかん」
「ほう…」

男がひきつれた笑いを浮かべた。

「騒ぎだと？ 冗談じゃねえ！ 明日もわからねえ二人が今、ここで必死に支えあってんだ。オレはあの病気の坊やに何かあったら飛んでって助けてやらないけねえんだ、邪魔するなっ！！」

「二人…坊や…病気、だと？」

「そうだ！ それがどうした！？」

「お前、殉と清水加夏子を見張っているのか」

「知ってるのか？ あの二人を」

影が灯りの下へ踏み出してきた。
右目のアイパッチに銀さんは初めて気がついた。

「…どうやら、殉が世話になってるようだな」

「アンタ、誰なんだ？」

「堀川烈。殉は俺の弟だ」

「おとうと…」

銀さんは毒気を抜かれて、その男を見た。
まわりつく殺気のような気配は消えていた。

「もうだめなのか、殉は」

殉の兄と名乗った男はするりと銀さんの脇まで来た。
足音はしなかった。

「加夏子ちゃんが坊やを連れ出した。俺は止められなかった。あのまま病院にいても天井眺めながら死ぬのを待つだけだ。思い出ってやつを作らせてやりたかったんだ。だから俺は…」

「いいオトナがストーカーよろしく尾けてきた、か」

「あんただってそうなんじゃないか？ 堀川さん」

「ふっ… 違う」

堀川は銀さんの手からワンカップを取ると、ひと息で飲み干した。

◇

男が二人、暗がりの茂みの中で腰を降ろしている。

堀川と、銀さん。

近くのコンビニで銀さんが買ってきた酒を飲みながら、二人は黙ってホテルの方を見やっていた。

黙々と酒を空けてゆく。

銀さんは日本酒を、堀川はビールを。

どちらも微塵の酔いも見せなかった。

何時間が過ぎただろうか。

「アンタ、ひと、殺しただろ」

不意にぼそりと銀さんが口を開いた。

「ひとりやふたりじゃねえ数だ」

断定だった。

「それがどうした」

「殺し屋って風には見えねえが」

「傭兵が仕事だ」

「それでか…」

堀川のビールが空いた。握りつぶし、放り投げた。

銀さんがコンビニの袋から新しいビールを出して渡すと、堀川が黙って受け取りプルトップを引いた。

「お前もそうだろ」

「あん？」

「殺しをした奴はすぐに判る。臭いがすんだよ。身体じゅうからな」

「へっ…」

ぐびっとワンカップをあおると、銀さんはスルメをくわえた。

「リハビリトレーナーとか言ってたな。何でそんなもん始めたんだ」

「飽きた」

「あきた？」

「チャカでもポイントウでもよ、やり合う時あ燃えた。血が沸騰するみてえだった。なんもかんもほっぼり出して逃げ出した俺が唯一、生きてるって実感できたんだ。それがあの日ふっと消えちまった。対立組織の組長、組員、たった一人で殺っちまったんだ。俺も撃たれた。これでハクつけて華々しく死ぬる、そう思った。だが死ななかった。目え覚まして、病院の天井見上げて、自分がまだ生きてることに気づいた時、どうでもよくなっちまったんだ。血が沸騰する事も二度と無かった」

そこまで一気に話すと、銀さんはひとくち日本酒をあおった。

「空っぽだったんだな、お前」

「ああ。傭兵にやそんな事はねーんだろうな。この世は戦争だらけだ。死ぬも殺すも自由自在じゃねえか」

「同じだ」

「？」

「俺も生き残った。無謀な攻撃…確実に死ぬと判っていて突っ込んだ三人のうち、俺だけが」

「で？ アンタどうしたんだ」

「飽きちゃいないが、死んだ奴らがうるさくてかなわん」

「へ、へへへっ」

「何がおかしい」

「アンタみたいな男でも冗談いうんだな」

「冗談、か」

堀川がまたホテルを見上げた。